母の遺影は、昨夏の嬉野旅行の写真だった。

襟元がくたくたになった薄桃色の寝巻きを着て、こちらに笑いかけている。

わたしが唯一母にしてあげられた親孝行が、デビュー作の印税で母を和多屋別荘に泊めることだった。

母が亡くなったのは、わたしが上京した翌日だった。葬儀の手配は父がすべて行ってくれていて、気づけば写真も選ばれていた。写真を見ていると、半年前の思い出が蘇ってきた。

佐賀市内で育ったのに、嬉野には一度も行ったことがなかった。夏の盛りだった。武雄で降り、図書館に立ち寄った。母は本を読まない人なのに、付き合ってくれた。高い吹き抜けで、二階まで書架があり、高窓から落ちる陽光が背表紙を照らしていた。わたしは本を読み、母はスタバでフラペチーノを飲んだ。

出無精の母だった。家族旅行に行ったことは一度もない。友人も少なく、病気をしてか

らは一層、家から出なくなった。母を外に連れ出したいと、ずっと思っていたのだ。

武雄から嬉野までは山道をバスに揺られていった。嬉野川の河畔に佇む宿泊施設は広大で、館内を歩いているだけで目新しいものが次々に飛び込んできた。宿泊する部屋は最上階の洋室で、窓の下に嬉野の街が沈んでいた。展望風呂は檜で、掛け流しの湯が縁を越えて流れつづけ、ずっと水の音がしていた。

母の希望で露天風呂のある宿にしたのに、母は部屋の展望風呂でいい、と言い出した。あとで聞いたところによると、部屋ごとに露天風呂がついているものだと思っていたそうな。そんなランクの高い部屋泊まれるか！

でも、これが最後の母娘旅行になると知っていたなら、そのくらい奮発してもよかったのかもしれない。

旅行の数日後に今村翔吾さん主催のイベントに登壇する予定があったので、わたしは夕食後、イクサガミを読みはじめた。母は夕食

の焼肉を三枚くらいだけ食べて、展望風呂に三分だけ入り、二十二時には「眠くなっちゃった」と布団に入った。

……ちゃんと楽しんでる？

何度も聞いた。楽しいよ、と母は言った。家事から解放されるのが嬉しい。奮発した宿代を思うと、なんだかやるせないが、本人の言を信じるしかあるまい。母に期待しても無駄だと諦め、一人で大浴場に向かった。

通路にはランタンアートが並んでいた。和紙を透かした灯が足元にぽつり、ぽつりと続く。車椅子でも階下に下がることのできる機械が設置されていた。実は、母が降りられるように調べていたのだ。無駄になったけど。

湯はさらりと熱く、とろみのある肌触りだった。露天風呂にも行った。川のせせらぎを聞きながら、ゴツゴツした岩に囲まれて熱い湯の中で足を伸ばし、開放的な気分になって……温泉の醍醐味を味わわないなんて、母はなんてもったいないことを。

バシャバシャと顔に湯をかけた。美肌の湯らしい。わたしは昔から肌が弱く、すぐ荒れるので母には随分と心配をかけた。幼い頃には全身ベトベトになるくらい皮膚科の薬を手ずから塗ってくれた。当時は温泉もプールも躊躇われるほどだった。

皮膚の弱さは母から受け継いだ。気弱さも、気にしいなところも、胃腸の弱さも。一つくらいいいところを受け継いでもいいだろ、と文句を言いたくなる。

いつも自信なさげで、体が弱く、床に伏せっていることの多い母だった。もちろん、美点もあった。滅多なことでは怒らなかった。料理を三六五日作ってくれた。進路に悩んだとき、背中を押してくれたのは母だった。母がいなければ、わたしは小説家になってはいないだろう。

そんなことを考えているうちに、すっかりのぼせてしまった。部屋に戻ると、母は寝息を立てていた。

一泊二日の、短い旅行だった。翌日は館内の三服で本を買って帰った。帰りの新幹線で、母は「また来ようね」と何度も言った。前の晩に母がすぐに寝てしまったことに拗ねていたわたしは「もう来ない」と返した。素直に、また来たいね、と言えばよかった。

客室で、三服で、ロビーで。何枚も写真を撮った。帰りにはエントランスで、二人並んで撮ってもらった。翌月、母が入院してからの半年間、その写真は病室のベッドサイドテーブルにずっと置かれていた。

母が危篤になったとき、編集者に「親孝行してよかったですよ」と軽い調子で言ったら、「お母さんが親孝行させてくれたんですね」と言われ、ああ、そうだったのか、とその言葉がストンと胸に落ちた。

遺影は何人もの人に「良い写真だね」と言われた。悪い写真だねと言ってくる人はそりゃあいないだろうが、うれしかった。

遺影の母は、幸せそうに笑っている。